



20th century's vestige

1900年代後半、日本は高度経済成長を経験するなど、大きく経済を発展させてきた。

そして、その発展を支えてきたのが港、道路、鉄道といったインフラであった。

数多くの工場が建てられ、物流が発達し、日本を支えてきた。

今回の敷地、四日市港もその中で、中京工業地帯の中枢として重要な役割を担ってきた。

沿岸部にはコンビナートが立地し、石油化学工場が立ち並ぶ。

しかし、21世紀を迎えると経済の縮小が懸念され、インフラは老朽化してきている。

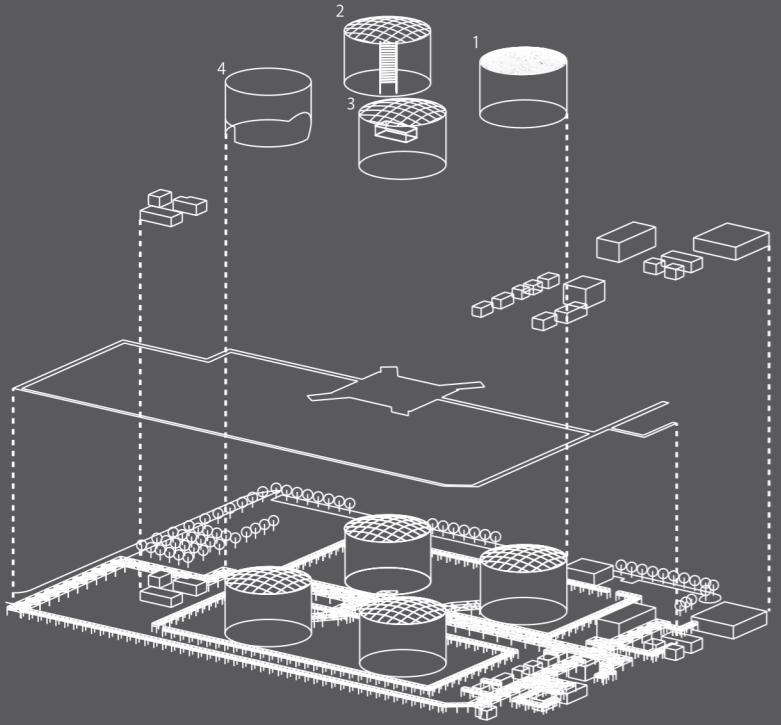
これまで石炭石油に頼ってきた発電も燃料の枯渇が懸念され、現在のようなエネルギー供給システムが成り立たなくなるかもしれない。

再生可能エネルギーが普及し、発電システムが分散することも予想される。

現在稼動している四日市港の工場群、発電所もいずれ役割を終え、終焉のときを迎えるだろう。

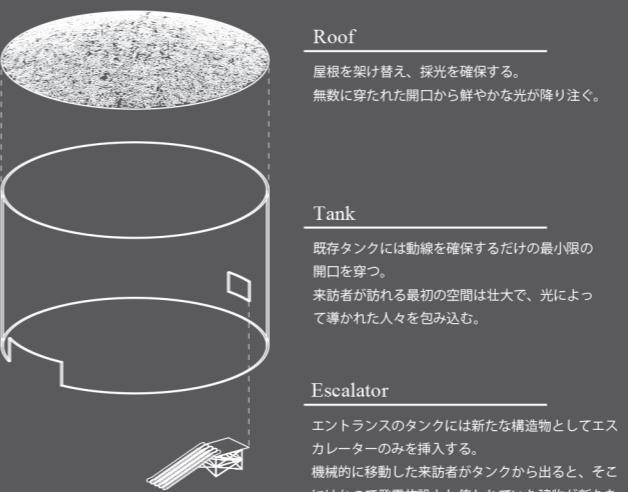
ここでは、新しいプログラムを提示することにより、発電所が建築として新たな時を刻み始める術を夢想する。

Overall Structure Axonometric Composition



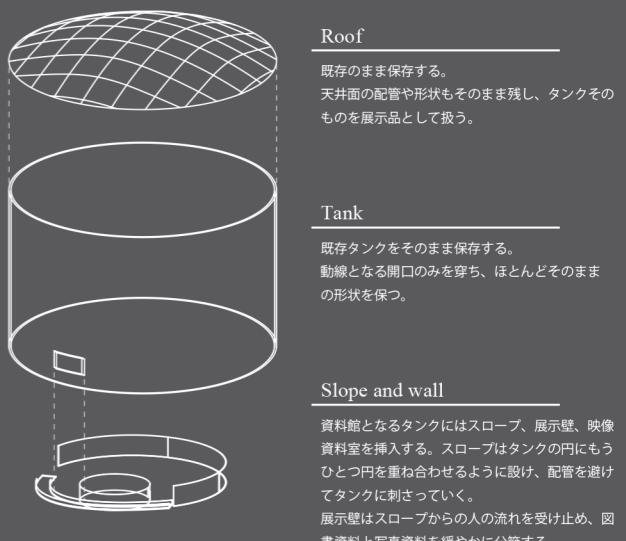
1. Entrance Axonometric Composition

人々を向かい入れる最初の空間は他を圧倒するものでなければならないと考える。巨大なタンクにエントランス機能のみを持たせる。天井面の加工による採光と動線の確保のための最小限の操作を加える。直径63m、高さ40mという圧倒的なスケールの中で、ただ光だけが降り注ぐ祈りの空間とも言うべきエントランスが出現する。



2. Museum Axonometric Composition

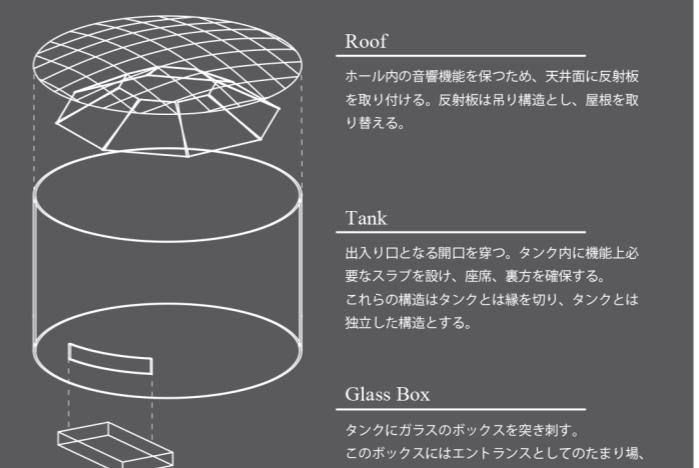
四日市の発展の影には「四日市喘息」という決して忘れてはならない負の歴史がある。時が経ち、空気は浄化され環境は改善された。しかし、その記憶は決して消し去られではない。ここではその当時を写真や新聞記事、裁判の記録を展示し後世にその記憶を伝える。タンクには出入り口となる開口を設ける以外の操作を加えず、タンクそのものが歴史を伝える展示品となる。



3. Theater Axonometric Composition

タンクを劇場として使用する。巨大な円筒の中に収容人数3000人の巨大なホールが出現する。

ステージを円筒の中心に据えることにより、ステージから客席までの距離を30m以下とし、2階席を設けず客席を一体的なすり鉢状にすることでホール内に一体感が生まれる。



4. Open-air Theater Axonometric Composition

タンクを野外劇場として用いる。タンク内は可変性を残し、一種の実験劇場となる。
穿たれた開口から中で行われている演奏が漏れ出し、人々を惹きつける。

